
月夜

吉野桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜

【Nコード】

N3848L

【作者名】

吉野桜

【あらすじ】

さまよう心は魂そのもの。

悲しい少年のホラー短編です。

（前書き）

連載中の「灰都」をあまりにも放置しすぎてすみません（――；
）>

とりあえず、活動再開に際して、昔の短編作品ですが掲載します。

「なあ、」

「ん？」

「生まれた瞬間って覚えてるか？」

守がガードレールに腰掛けて、隣に同じように腰掛ける千尋に尋ねた。

「覚えているわけないじゃん」

千尋は薄雲が端にかかった月を見上げてのんびり答えた。

そう答える千尋の顔をしばし見つめて、守は思う。

幼さを多分に残してはいるが、彼は存外整った顔立ちをしている。月明かりの許、いつそう白く見える頬がどこことなく作り物めいて、それはとても綺麗なのに、暗がりで見える精巧な人形のように気味の悪さを拭えない。

しばしの沈黙の後、守は総毛だった肌をそっと抱きしめて、千尋から視線を外し会話を続けた。

「だよなあ、やっぱり。じゃあさ、だとすると、死ぬ瞬間ってのも覚えてないもんなのかなあ」

「なんだい、今夜は。おかしいことばかり聞くね」

そんなに遅くない夜だというのに、二人の目の前を流れる道路はとても静かだった。

先ほどから全く車が通らないのだ。

守はベージュ色のパンツのポケットを探ってひしゃげた煙草の包みを取り出した。

「赤んぼってさ、生まれてすぐ泣くだろ？ 何がそんなに悲しいの？ ってなくらい……」

煙草の包みを片目でのぞき、下に振ると最後の一本が出てきた。

「煙草、吸うのか？」

「あ、ごめん。千尋嫌いだったけ？ これ最後だから許して」

とても不機嫌に千尋は守を見た。

「あつと、どこまで話したっけ？」

千尋の視線の居心地の悪さに、パタパタを胸元を探り、ライターを探した。

「赤ちゃんがどうのこうのって、」

「そうそう。俺ね、赤んぼってどっかから別れてきて悲しくて泣いているんだと思うんだ」

千尋が怪訝そうに守を見る。

「話が見えない」

結局最後の一本を吸って、守はその煙を闇夜に白く燦らせた。

「あんだだけ泣くんた。きつとすぐいい所だったんだろっな」

「知らないよ。赤ちゃんに聞いてみたら？」

千尋はやや頬を膨らませてそっぽをむく。

「・・・・俺ね、生まれたってことを自覚して初めて《生》の住人だと思うんだ。なんていうのかな、自覚が存在理由というかなんというか・・・・」

少しの間、月が夜の雲に姿を隠され、あたりの闇が濃くなった。

守は言葉を続ける。

「《生》と同じように、死も自覚して初めて本当の《死》が訪れると思うんだ」

千尋の顔色がサツと変わる。

「な、何が言いたいのか？」

千尋の問いに守は月の隠れた空を見つめてしゃべる。

「生まれる前のことを生まれたら忘れていくように、死が訪れたら生きていた時のことを忘れていくのかなあ。もしかしたら《生》の前と《死》の後って同じ世界なのかもな。・・・・そうして魂はぐるぐるまわるんだ」

残りのある煙草を路面に投げ捨て、守はまっすぐに千尋を見た。沈黙の中、火を灯しながら吸殻がころがった。

千尋は下唇をかみながら俯いていた。

「千尋？」

守の呼びかけに答えずただただ千尋は首を振る。

千尋は彼がこれから何を言おうとしているのか知っていた。

「俺たちはいつまでその世界を拒否するんだ？」

「や、めて」

千尋が顔を上げて守を見る。その真つ黒な瞳にうつすら涙が浮かんでいた。しかし、守は話を止めない。

「俺は気付いたんだ」

「言わないで！」

「自覚したんだ、千尋。魂は止まっていたはいけないんだよ。止まっていれば澱むだけだ……」

「どうしてさ、どうして気付いたりしたんだ！」

涙声で千尋が叫ぶ。

「君は僕を呼んだけど、」

「お……こつてる、の？」

千尋が嗚咽をこらえて守に問う。

守はゆるく首を振った。

「さよなら、千尋」

「やだやだ！ 待つて！ 行かないでっ！ 僕を一人にしないで！」
守が悲しそうに千尋を見つめて、闇に溶けた。

「一人はいやだよ！」

悲鳴のように千尋が叫んだ時、一台の車が千尋の前を通り、ゆるやかなカーブで大きく弾いた。

人がどこからともなく集まり、サイレンの音がやかましく鳴り響いた。

「やだわ、またここで事故？ こんなに見通しいいのに……」

「事故にあったの日高さんとこの息子さんですって」

「まあ、日高医院の？」

女は頷く。

「これで何人目かしらねえ。最初は、」

「野木さんとこの息子さんよ。まだ高校１年生だったわよね」

「そうそう、綺麗な子だったわ。でもあの子は確か事故じゃなかったような……」

「うん。あの子は借金苦に親があの子を置いてどこかへ行っちゃって、残された男の子、あのカーブに単車でつっこんで自殺したって話よ」

女たちはカーブを見つめる。

「やあね、祟りかしら」

「やあ」

事故を見つめていた千尋はいきなり背後から声をかけられてビクリと振り向いた。

そこにはスマートな灰色の背広を着た優面の青年が立っていた。

「泣いてるの？」

男は「ん？」と千尋の顔を覗き込み優しく微笑んだ。

「貴方は、誰？」

「オレかい？ オレは日高。日高アキラっていうんだ。君は？」

「僕は、野木。野木千尋」

「へえ、千尋くん。ね、隣いい？」

アキラが千尋の座るガードレールの隣を指差す。

千尋は真っ黒な瞳を見開いて、

「いい、よ」

嬉しそうにはにかんだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3848/>

月夜

2010年10月8日15時03分発行